

NPO法人 自立支援事業所 サンレジデンス

SUN通信 第6号

2018. 1. 22 発行

NPO法人 自立支援事業所
サンレジデンス

〒011-0023

札幌市北区北23条西5丁目

1-18 Dio23ビル3F

TEL 011-746-8889

FAX 011-299-3107

30年という歴史のなかで

SUN通信第4号で少しお知らせしましたが、私たちとタッグを組み、協働していただいている(株)パートナー札幌支店が、平成29年6月16日、設立から30周年を迎えました。この日行われた「開設30周年記念祝賀会」には、全国の支店から来られた(株)パートナーの職員の方々はもちろん、三笠市長、札幌支店とゆかりのある方々、サンレジデンスの賛



パートナー札幌支店30周年記念祝賀会の様子

助会員や連携団体の方々等、110名以上の皆様にご参加いただき、なごやかな雰囲気の中、実に盛大な祝賀会となりました。

会の中盤で上映された、札幌30年の歩みを紹介するスライドショーを見ながら、私は「皆さん、若い!!」と自然に微笑が浮かんでくるのを感じつつ、支店に携わった人たちの表情が、みんなとてもいい顔をしている

と思いました。そして人物や建

物の背後になにげなく映し込まれた物や風景に、改めて30年という長い歴史を感じ取ることが出来ました。

何事にも言えることですが、物事を途切れることなく続けていくという作業は、簡単なことではありません。ましてや事業を継続するとなると尚更です。人、物、金の問題をクリアしながら、時代の情勢、世の中の人々のニーズ、ライフスタイル等、様々な変化に対応することが出来なければ、その事業は立ち消えてしまうことでしょう。そんな変化に向き合うとき、自らもCHANGEしながら成長を続けられる組織にされた、歴代の職員や関係者の努力や苦勞を想像すると、只々頭が下がる思いです。そして変化を恐れない勇気



会場にて アパートナー札幌支店の皆さん

と行動力があってこそその 30 年だったのでしょう。サンレジデンスは、そんな歴史の中の、まだほんの一部です。今後、(株)アパートナーの社会貢献部門としての責任と自覚を更に強め、多様化する貧困のかたちに対して、自らも変化を恐れずに活動しなければならない。そうでなければ、この活動は停滞してしまうのだと、そう痛感させられた一日になりました。

あえて弱点に目を向けて

NPO法人として生まれ変わったサンレジデンスの活動も、第 4 期に入りました。(株)アパートナーと協働することにより、帰る場所がない、住むところがないという当事者の問題をいち早く解決できることは、私たちの長所であり、最大の武器であることは今さら言うまでもありません。しかし、長所があれば必ず短所もあるものです。

そこで、更に精度の高い支援活動にするために、あえて今回はサンレジデンスの弱点について考えたいと思います。

現在、サンレジデンスに入居中の方々の内、完全自立を含めおよそ 30%の人が就労しています。自己満足ではありませんが、65 歳以上の高齢者や、障害や病気で働くことの出来ない人たちが多くいる中での数字ですから、これはなかなかのものだと自負しています。

働いている人は当然ながら、日中家に居ることが少ないですし、私たちスタッフ側も、この人はもう大丈夫だろうと安心してしまふところもあり、顔を合わせる頻度が少なくなりがちです。実は、ここに大きな落とし穴があるのです。

※第 3 期終了時（平成 29 年 9 月末現在）の入居者生活状況

●男性 76名 ●女性 11名 ●世帯での入居 3世帯 合計 90室

- ・生活保護で生活 60名
- ・年金で生活 4名
- ・就労しているが、収入が生活保護基準に満たないため一部生保受給 15名
- ・就労収入で完全自立生活 11名

昨年末、こんな出来事がありました。

他支援団体を経由して、昨年4月にサンレジデンスに入居したF君は20代後半の若者です。情緒面に不安があることは聞いていましたが、彼は入居後すぐに大手ファストフード店で仕事を見つけ、就労を開始しました。元来、真面目で一生懸命に仕事をこなし、働くことに喜びを感じる事が出来る人物なのでしょう、その表情は生き生きとしていました。

しばらくして、生活保護廃止のタイミングについて話しをする機会があり、彼の部屋を訪問すると、室内は綺麗に整理整頓されていて、しっかりとした生活を送っていることが窺え、私は彼がこのまま頑張ってくれることを期待していました。

ところがある時期を境に、突然F君と連絡が取れなくなったのです。何度部屋を訪れても鍵が閉められたままで会うことが出来ず、そのうち家賃も滞納するようになりました。もしかしたら失踪してしまったのかと思い、ある日スペアキーを使って部屋に入ってみたのです。すると、綺麗だった部屋がまるでゴミ屋敷のように変貌し、足の踏み場もない状態になっています。当の本人はロフトの上で大量のお酒と菓を飲み、昏々と眠っていたのです。そして布団の横には、2本の包丁が置かれていました。



結局、F君は精神科の病院に強制入院となってしまいました。後日面会に行き、ようやく詳しい事情を聞くことが出来ました。対人面において自信が持てない彼は、普通であればなんでもない些細な出来事に深く傷つき、体調面にも支障が出て仕事に行けなくなったそうです。それを誰にも相談出来ず、一人でストレスだけを溜め込み、最後は自暴自棄になりました。2本の包丁については、いつでも死ぬるように手元に置いていたと言います。

綺麗に整理整頓されていたのに・・・

面会中、彼は何度も何度も頭を下げ続けていました。だけど、頭を下げなければならぬのはむしろこちらの方だという気がします。

サンレジデンスが借り上げている部屋は、札幌市内各地に点在しています。私たちの支援活動は、一棟集中型の施設に入居者を集め、そこに職員を常駐させるというものではなく、基本的には個々人で自由に単身生活を送ってもらう形態になっています。もちろん、地域社会の中で自立した生活を取り戻してもらうのが活動の趣旨ですから、これはこれでいいと思うのですが、その一方でスタッフが、常時90名を越える入居者の「日常に寄り添う」部分が、どうしても希薄になってしまうのも残念ながら事実です。ここが私たちの弱みです。

F君のように、精神的に追い詰められていても口に出して相談できないという人は決し

で珍しくありません。今回のケースでも、日常の中でもっと顔を合わせる機会を増やせていたら、言葉に出さなくても表情や態度、生活の変化に私たちがもっと早い段階で気づき、こちらから声を掛けることは可能だったはずです。もしそうだったら、彼はこんなにまで酷い状態にはならなかったと思うのです。反省と共に、なんとも形容しがたい無力感に襲われました。弱点をそのまま放置するわけにはいきませんが、では具体的にどのような対策が有効なのか、まだまだ検討と準備が必要です。そして支援者が当事者の生活にどこまで関与し、どこまで踏み込むべきなのか、これは私たちにとって永遠の課題なのかも知れません。

2018 今年もよろしくお願ひ致します

目まぐるしいほどのスピードで日々が流れていき、新しい年が始まったと思ったら、1月ももう中旬を過ぎてしまいました。困窮者支援活動に携わるようになってから、一年のサイクルがそれまでの倍以上の速さを感じます。

今の札幌は、一年で最も寒い時期です。先日久しぶりに、札幌駅と大通公園を結ぶ地下歩行空間を歩いてきました。ちょうど新年会のシーズン真っ盛りで、少し顔を赤く上気させながら歩く人たちで混雑しています。

そんな人たちに紛れるかのように、所々に設置されたベンチに座り込む、路上生活者と思しき人を何人か見かけました。その中の一人に、「今もしお困りなら、私たちにお手伝いできることがあるかも知れないので、お話しを聞かせて頂けませんか」と、声を掛けてみました。その男性は、一瞬だけ何かを訴えるような表情を浮かべましたが、すぐに顔の前で手を横に振り、目を閉じてしまいました。

彼らは外の冷気を避け、少しでも暖の取れるこの歩行空間のベンチで、座った状態で眠っているのです。周囲の喧騒をよそに、まるでその人の存在だけが「疎外」されているかのように。

この光景は珍しいものではありません。むしろ当たり前のように出くわす場面です。自己責任という場合もあるでしょう。しかし私は、こんな光景が「奇異」に映るのではなく、当たり前になっている社会にこそ、大きな問題が隠されているように思えて仕方ありません。

2018年が始まりました。皆様、今年もどうかよろしくお願ひ致します。私たちの活動に一人でも多くの方がご賛同、ご参加いただければこれほど嬉しいことはありません。

私たちの一歩はととてもとても小さなものですが、明るい社会の創造に向けて確かな足跡を印していきたいと思ひます。

NPO法人 自立支援事業所 サンレジデンス
松下 和広